

芸東海域におけるメダイ漁業の特徴と調査上の課題

○大河 俊之（室戸漁指）

【目的】

メダイは高知県においてキンメダイやムツ、アカムツと並ぶ重要な深海魚資源である。近年、芸東海域ではキンメダイの不漁により本種を漁獲する漁業者が増加しており、水産庁はTAC管理を見据えて本種の調査を開始している。このように重要性が増しているメダイであるが、深海漁業の対象種として最上位ではなかったことから、高知県海域の資源生態に関する情報は乏しい状況にある。そこで、本研究は深海魚の釣漁業が盛んな芸東海域においてメダイ漁業に関するデータを解析し、その特徴を明らかにするとともに、今後の調査における課題を整理することを目的とした。

【材料と方法】

2009（H21）年4月以降の高知県漁協、すくも湾漁協、旧窪津漁協の漁業種類別、市場別漁獲量を算出し、県内のメダイ漁獲における芸東海域の位置づけと主要水揚げ市場を調べた。次に芸東海域における主要水揚市場の漁業種類別及び銘柄組成別、1日1隻当たりの漁獲量を算出し、各市場の特徴を漁業関係者からの聞き取りも踏まえながら考察した。また、2009（H21）年以前の漁獲データも収集し、メダイ漁業の変遷や状況を整理した。

【結果】

近年、高知県全体でメダイはほとんどが釣漁業で漁獲されており、漁獲金額は概ね年間70百万円で推移していた。水揚市場は甲浦、室戸岬、室戸、清水、田ノ浦の水揚げが全体の90%を占めており、近年、芸東海域の占める割合が高くなっていった。

各地域の漁獲状況を見ると、室戸岬は6月から12月を漁期とする夜間の一本釣主体で、キンメダイの不漁に伴い2018（H30）年以降に漁獲量が増加していた。魚体は3.0kg以上の大型個体主体であった。

室戸は1965（S40）年以降の漁獲データがあるが、1972（S47）年の大正礁における樽流し漁の導入に伴う増加、1982（S57）年以降のキンメダイ漁へのシフトに伴う減少、キンメダイ不漁に伴う一本釣における漁獲量増加といった様々な変化の影響を受けていた。本研究では長期的な銘柄組成の解析は実施できなかったが、2010（H22）年以降のサウス山におけるキンメダイ漁の混獲魚は1.0～2.0kgの当歳魚と思われる魚が主体であった。ただし、2014（H26）年以降、このサイズの魚の漁獲はほとんど見られなかった。

甲浦は年度ベースで1977（S52）年以降の漁獲データを収集することができ、漁協への聞き取りから漁場や漁法の変化は少なかったと推察された。操業は主に大正礁において樽流し漁が行われ、4.0kg以上の大型個体を漁獲していた。

【考察】

室戸や室戸岬では他の漁業や漁法といった人為的な影響に伴う変化が観察された。このため、漁獲量やCPUEの解析を行う際には注意が必要と考えられ、甲浦の情報が有用と考えられた。ただし、甲浦の詳細な漁獲情報は2009年以降に限定されており、室戸の情報を組み合わせながら資源変動を考えていく必要がある。

増沢（1975）は本種の生活史の仮説として、芸東海域や薩南に産卵場があり、流れ藻で東北海域まで輸送された稚魚が成長し、南方に回遊する、というモデルを示している。今後はこのモデルを作業仮説として、他県と連携しながら芸東海域での産卵生態や年齢別漁獲尾数の把握といった基礎的な情報により検証していくことが、高知県における本種の資源生態を明らかにする近道になるのではなかろうか。